

所聞しよもん、誓不成正覺せいふじやうしやうがくと誓ちかはせられてある。衆生しゆじやうが名號みやうがうを聞きうる處ところで、阿彌陀如來あみだにょらいの佛心ぶつしんが凡夫ほんぶの心こころに入り満みちる、そこで行者ぎやうじやの心中しんちゆうに、他力たうりきの信心しんじんが顯あはれる。依よつて御當流ごたうりゆうでは聞きくといふことが大切たいせつである。

一文多證  
釋に就御

六 祖師そししやうにん聖人せいじんの一念多念證ねんたねんしやうもん二文右もんごみやうがうに、「聞其名號もんごみやうがうといふは、本願ほんぐわんの名號みやうがうをきくこのたまへるなり。きくといふは、本願ほんぐわんをきく疑うたがふこゝろなきを聞きくといふなり。

又聞またきくといふは信心しんじんをあらはす御みのりなり」と御釋おんしやくあらせられてある。此御釋このおんしやくは同じ様おなやうな御言葉おことばであつて、能よく味あじはねば思召おもほめしが知しれませぬ。試こころみに窺うかがうて見みると、初はじめに「本願ほんぐわんの名號みやうがうをきくこのたまへるなり」とは、聞其名號もんごみやうがうの四字じを總そうじて御釋おんしやくあらせられたものである。こゝに注意ちゆういすべきは、本願ほんぐわんの二字じを加くはへ給たまふ事ことである。本願ほんぐわんとは四十八願むじゅうはちじゅうはちぐわんに通つうずる言葉ことばなれ共とも、祖師そししやうにん聖人せいじんが常々つねづね本願ほんぐわんとのたまふは第十八願だいいちじゅうはちぐわんのことである、全體ぜんたい其名號そのみやうがうとある其そのと指さしたは第十七願だいいちじゅうななぐわんなれども、夫それを本願ほんぐわんの名號みやうがうと仰あふせられたは、十七願じゅうしちぐわんの諸佛しよぶつの讚嘆さんたんは外事ほかごとはない、十八願じゅうはちぐわんのこ

三部經  
の要旨

ろを御述おのべなさるゝのである。夫それが諸佛しよぶつの名號みやがう讚嘆さんたんである。唯ただこの名號みやがうは尊たふい法ほふ門もんであるから、信しんせよといふ様やうな御勸おすめではない。本願ほんねんの謂いはれを具つぎに説さき述のべさせられて、我々われくに聞きかせて下くださるのが諸佛しよぶつの讚嘆さんたんである。

七 三部經みぶきやうを約つづめて見みれば、觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうは機きの眞實しんじつを顯あはし、大無量壽經だいむりやうじゆきやうは法ほふの眞實しんじつを顯あはし、阿彌陀經あみだきやうは機法きほふの眞實しんじつを合あはせ説さき給たまふより外ほかはありませぬ。此この機の眞實しんじつと法の眞實しんじつとを説さきたまふが、即すなはち名號讚嘆みやがうさんたんである。是これが即すなはち第十八願だいじゅうはちねんの理ことわりを具つぎに御説おのきなさるゝのである。此この阿彌陀如來あみだにょらいの本願ほんねんは、如何いかなる者ものをたすけ給たまふぞ、總そうじて申まをせば十方衆生はうしゆじやうが皆所被みなしよびの機きなれども、別べつして正所被しやうしよびの機きを尋たづぬれば、惡人女人あくにんによにんが本願ほんねんの正客しやうきやくなりと顯あはし給たまふが、觀經一部くわんきやういぶの説相せつさうである。其その惡人女人あくにんによにん人のたすかる謂いはは、阿彌陀如來あみだにょらいが五劫ごうに思惟しゆいして、超世てうせの大願だいねんを發おこして、兆載永てうさいえう却こに積苦累德しやくくるみとくして因位いんにの萬行まんぎやう、果地くわちの萬德まんとくを名號みやがうに攝在せふざいして、聞信もんしんする一念ねんに至し

心しん回わ向かうと施せ與よし給たまひ、其その時とき往わう生じやうを定ぢやう得とくせしめ給たまふぞと説とき聞きかしめ給たまふ。是これが第だい十七じゅうしち願がんの讚さん嘆たん、故ゆゑに諸しよ佛ぶつの讚さん嘆たん即すなはち第だい十八じゅうはち願がんの相さうである。夫それを聞きいて信しんずるゆゑ、本ほん願がんの名な號ごうを聞きく事ことなりとの給たまふのである。

名な號ごうを聞きくとは本ほん願がんを聞きくことである。正しやう信しん偈げには本ほん願がん名な號ごう正しやう定ぢやう業ごふと仰あふせられた。經きやうに名な號ごうを聞きくとあるを、信しん卷まきには佛ぶつ願がんの生しやう起き本ほん末まつを聞きくとの給たまふ。諸しよ佛ぶつの名な號ごう讚さん嘆たんは第だい十八じゅうはち願がんの理りを説とき給たまふより外ほかはないから、聞もん其こ名な號ごうの四し字じを總そう釋しやくして、本ほん願がんの名な號ごうを聞きくとのたまへるなりと示しめさせられたのである。

聞の字の二釋

八つぎ次つぎに、「きくといふは、本ほん願がんをきゝて疑うたがふ心こゝろなきを聞きくといふ」。「又またきくといふは信しん心しんをあらはすみのりなり」。此この二しよ釋しやくは聞もんの一字いちを法ほふと機きとに約やくして釋しやくせられたものである。きくといふは本ほん願がんを聞きいて疑うたがふこゝろなきをきくといふ。是これは機きに約やくしての御おん釋しやくで本ほん願がんをとあるのと疑うたがふ心こゝろなきといふ處ところに、氣きをつつけねばならぬ。他た流りうの十じゆ念ねんの御お授さつけの樣やうに、南な無む阿あ彌み陀だ佛ぶつといひ聞きかせて、是これで往わう生じやうと信しんせ



藥賣りの  
喩

よと人に言うても夫ではいかなる者も信ずる事は出来ぬ。そこで、諸佛の讚嘆は第十八願の謂を具に述べて、善根を羨んで居る者には善もほしからず、只ほしからず計りではない、願力成就の報土には、自力の心行は用には立たぬ、却つて自力をたのむ心は邪魔になるほどに、雑行雑善をなげすてよと、萬行の少善を嫌うて捨てしめ給ひ悪機をながめて恐れて居る者には、罪は山程あつても、障は海程あつても罪や障りは願力の不思議を以て消し亡ぼして下さるゆるゑ、悪をも恐る可からず、願力を妨ぐる程の悪無きが故に、罪の深きをば打捨て、彌陀にまかせ參らせよと御説き下さるのである。そこで衆生が我身は悪き徒者なれ共、かゝる機までもたすけましますは阿彌陀如來ばかりなりと信じ奉る様になるのである。こゝは昔から藥賣りの喩を出す處である。只藥々妙藥で御座い、御買ひなされというては、買人はない。そこで人形までこしらへて、病の相を見せ、頭痛眩暈ひ立ぐらみと、病の名前を言ひ並べ、是等の病に用ゆれば屹度治ると云うて聞



法體募りの人の疑ひないといふのは、只疑はずに居るだけで、本當の疑ひ晴れたのではない。御正意は今まで疑ふたものが疑ひ晴れて、もう疑はれぬ様になつたのである。そこで疑心あることなしとも仰せられて、其疑はれぬ様になつた心は、願力に乗托して、たすけたまへと思ふ心より外はない。是が誠に名號の謂の聞き得られたのであるといふことで、本願を聞いて疑ふころのなきなりと御意あらせられた。

法體募りは、只疑はぬと云ふ分齊だけであるが、御正意は、往く先は眞暗りであつたものが、地獄ならでは行き場のない徒者を、たすけたまふ本願の謂を聞いて見れば、其仰に疑ひ晴れて、たすけたまへと彌陀をたのむ一念である。是が聞其名號なりと云ふ思召で、これが機に約しての御釋である。

聞と信  
二 次に「聞と云ふは信心をあらはすみのりなり」と、是は聞は能顯、信心は所顯で、聞は顯しての法で、信心は顯はされての機である。依つて聞を法に約し



て、「みのりなり」とのたまふ。

全體信心は名號に具はつた具徳である。已に大行の名號が其儘大信の信心に顯れるといふが、今家の思召である、大行が大信になるについて、中間に聞と云ふが一つある。聞が仲人となつて、大行の名號(娘)が大信の信心(嫁)となる。聞は大信を持つて居るものではない、大信は大行に備つてゐるものである。其故は名號は元來衆生に聞かせんが爲に拵へたもので、名號を成就して往生の正業としたまふには、聞を先にたて、拵へたものであるから、聞けば名號に相應する。觀念や坐禪は相應の法ではなく、名號に相應の法は聞の一つである。依つて聞は名號が持前で名號に備はつてある一徳である。そこで「聞といふは信心をあらはすみのりなり」。

大行が信心と顯れるに就いて、只では顯れぬ、聞が先に立つて大行が信心と顯はれて來る。依つて今「聞といふは信心をあらはすみのりなり」とのたまふので

ある。

聞は能顯の法、信心は所顯の機、名號の娘が耳の穴より行者の心へ這入つて、信心の嫁となる故、「聞といふは信心をあらはすみのりなり」と仰せられました。

三 時に聞の一字を、機に約すると法に約するとの二釋に取り扱ふことは、祖師の常軌である。信卷の末には、「聞といふは衆生佛願の生起本末をきつて、疑ふころなきを聞といふ」と機に約してある。また唯信文意に、「聞といふは信心をあらはすみのりなり」とあるのは、法に約しての御釋であります。

禪宗の和尚が眞宗の老婆に申さるゝには、「其許は日々説教を聽聞して居らるゝ様であるが、聞いた位で淨土參りが出来るか」と。老婆答へて曰く「御蔭で參らせて頂くことが聞き得られました、喜んで居ります」。和尚曰く「此方は毎夜觀念を凝して極樂淨土を眼前に見て居れど、ごうも參れるとは思へぬ。眼前に見て居る此方でさへ、參られさうにない淨土へ、聞いた位で參れるとは危いぞや」。そこ

禪宗の  
和尚の  
眞宗の  
老婆の  
問答



で老婆らうはが云いふには、「見みえる見みえぬと、往ゆける往ゆけぬとは筋すぢが違ちがひます。日月じつげつは見みえて居をれども往ゆかれませぬ、それは往ゆく道みちがない爲ためである。報恩講ほうおんかうには御本山ごほんざんへ參まゐらふと樂たのしんで居をりますが、見みえるかと仰あふせられても、此處ここからは見みえませぬ。見みえぬけれども參まゐれると信しんじて居をります。それは往ゆく道みちがあるからで御座ござる。和尚様おしやうさまは極樂ごくらくが見みえても往ゆかれぬのは、往ゆく道みちを御存知ごぞんちないからである。私わたくしは極樂ごくらくは見みえぬけれども、善知識ぜんちしきより本願ほんがんの大道だいだうを御聞おきかせにあづかり、今いまははや淨土じゆつ參まゐりの道中だうちゆうで、日々にちく御淨土おじゆつの近ちかづく身みとして頂いたきました。和尚様おしやうさまへ參まゐれぬと御仰おつしやる御淨土おじゆつへ、私わたくしの様な愚者ぐものが參まゐらせて頂いたけるとは、何なんたる仕合しあせ者もので御座ございますせう」。

和尚おしやうさま曰いは、「婆々ははそれは危あやいぞや」、婆々はは曰いは、「和尚様おしやうさまが見みなされたより、私わたくしの聞きいた方ほうが慥たしかで御座ございます」。和尚おしやうさま曰いは、「見みた方ほうが慥たしかぢや」と。互たひに云いひ争あそうて居ゐる處ところへ、十二三じふにさんの子供こどもが重箱おもむきを風呂敷ふろしきへ包つみ、「是これは粗末そまつなもので御座ございます、ご

うか召し上つて下さい」と差出した。和尚がそれを受取つて風呂敷を解かうとすると、老婆曰、「和尚様其風呂敷を解くのは暫く御待ち下さい、和尚様は毎夜極樂を見て居ると仰せらるゝが極樂の見える程の眼力なれば、四分板一枚の中位は見えませう。眞實に見えますならば其重箱の中の品物を、蓋を開けず、香をかゝずに宛てゝ御覧なさい」と云はれ、和尚曰、「それはいと安い事じや」と包みを前に置いてちつと考へて居らるゝ、婆々曰、「和尚様、禪宗は頓智第一とか申して證の早い宗旨と承はつて居りますが、彌となる存外御手間がとれますなあ、重箱の中のものを知る位の事に、二時間も三時間もかゝつてまだ知れぬとは、云ふは易く行ふは難いと見えますなあ、眞宗では重箱の中の物を知る位には、手間はいりませんがなあ」。和尚曰、「婆々でも知るかや」、婆々曰「すぐに知れます」。和尚曰、「それは不思議である。香かゝずに蓋あけずに、老婆が重箱の中の物を知るなら十圓遣らふ」。婆々曰、「それは難有う知つて見せます、其金此處へ出し

て置いて下さい。和尚曰、「よし此通り十圓出して置く、そのかはり間違ふたら罰金十圓取るぞ。婆々曰、「承知致しました、私も十圓出して置きます香かゝすに蓋あけずに知りましたら、十圓頂きます。和尚曰、「さああてゝ見よ。老婆は子供に向ひ。「若さん、何を和尚さんに持つて來なさつた」。はい牡丹餅で御座る」。婆々曰、「和尚様、重箱の中は牡丹餅で御座る」。和尚曰、「そなたは子供に聞いたではないか」。婆々曰、「はい聞きました、聞いて信ずるが眞宗の法で御座る。夫見なされ和尚様が三時間觀念なされたより私の一度聞いた方が慥で御座る。兎角我力で知れぬ事は、知つて居る人に聞くが近道で御座る。蓋あけず、香臭がずに知りましたそれでは十圓頂きます。他方信心とは斯様なもので御座る。南無阿彌陀佛」と稱名諸共に立ち去つたと言ふ事である。

四 時に前々席に、「佛願の生起本末を聞きて疑心あることなし、これを聞といふ」とある御釋に就いて、十義ばかりあると申したことに對して、各方面より追